令和5年度

京都府立綾部高等学校由良川キャンパス（東分校）

定時制課程

学校経営計画
（スクールマネジメントプラン）

実施段階

令和5年度　京都府立綾部高等学校（東分校定時制）　学校経営計画（スクールマネージメントプラン）　（実施段階）

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
・学力の向上と進路希望の実現 ・基本的生活習慣の確立 ・基本的人権を尊重する態度と豊かな人間性の育成 ・健康及び体力の維持向上 ・地域社会から信頼される学校づくりの推進	(成果) ◇「明日の京都を担う高校生育成支援事業」、「子どもの知的好奇心をくすぐる授業」、「高校生伝統文化体験（華道）」などの事業を有効に活用することができた。多様な体験的な授業や外部講師を招いての授業を通じて、生徒は日頃体験することができない経験をすることができ多くの成長につながった。また、SDGsの目標達成に向けて生徒の一人ひとりが、意識を高めることができた。 ◇BYOD1年目において、教員のスキルアップを図り、タブレットを活用した効果的な授業展開が着実に実施できている。 ◇コミュニケーション力に課題があり中学校で学校に適応できなかった生徒についても、暖かい雰囲気の中、落ち着いて学校生活を送ることができている。 (課題) ◆特別な支援が必要な生徒の指導が適切にできるために、教職員研修や教職員間の意思疎通を充実させ、教職員一人ひとりの指導力や知識を向上させるとともに、外部機関とも適切に連携をとりながら、指導や支援にあたる必要がある。 ◆学校案内の作成や教育活動の新聞掲載など、中学校や地域に対して定時制についての情報発信はできているが、さらに生徒募集にまでにつなげる工夫が必要である。 ◆過去、全国大会や近畿大会出場を果たしている卓球部については、今後、大会出場ができるように部活動の活性化をはかる。	**■A・G・P（Ayabe Global Program）の推進** **<スマートスクール>** ・ICTを活用した授業　・BYODを活用した授業 ・ONLINEの活用　・Slackの活用（ペーパーレス化・会議レス化） **<探究活動>** ・思考力・判断力・表現力の育成　・SDGsを授業や学校行事へ **<地域発信>** ・地域でのボランティア活動 **<連携事業>** ・NPO法人　・介護施設　・保育園 **■3Q＋4Sの推進** **3Q** **<Quality Teacher>** 教師としての資質向上 **<Quality School>** 教育内容の充実 **<Quality Students>** 未来を切り拓く人材の育成 **4S** **<整理><整頓><清潔><作法>** 整理整頓を心がけ、清潔な職場・学習環境を整える TPOに応じた言動を心がける 明るく元気に、笑顔がある学校

分掌・教科	項目（重点目標）	具体的方策及び数値目標	評価		成果と課題
1 組織運営	・生徒の実態に応じた教育の実践と魅力ある学校づくり ・業務のスマート化と教育内容の充実	本校の教育課題に対応した教育実践をするため、分掌・学年・教科間の連携会議を毎月実施する。	A	B	・毎日の打合せや、教育支援会議・職員会議等で生徒課題の共有や教育課題解決への話をし、適切な対応ができた。 ・外部講師による体験的活動や講演を積極的に行えた。外部への情報発信と、外部からの定時制教育の理解が課題である。 ・積極的な活用が試みられているが、活用方法やコンテンツについて更なる研鑽を必要とする。
		体験的な取組や外部講師を招いての授業を多く取り入れ、その取組内容を外部に発信し、社会全般における定時制の教育活動への理解を深める。	B		
		ICTを活用した効果的な授業実践や業務運営ができるように、教員及び生徒のICTリテラシーの向上に努める。	B		
2 教務部	・授業の改善に努め、学力の向上を図る。	校務システムを効果的に運用し、教務関係文書を正確に遅滞なく作成する。	B	B	・校務システムを活用して、連絡会を毎日行うこどで、生徒の状態を把握することができた。 ・教科補習が必要な生徒に対して、補習を行うことができた。ただし、全員を進級させることができなかった。
		教科担当・学級担任に教務関連情報を確実に伝達し、職員の意思統一を図る。	B		
		補習などを効果的に行い、生徒個々の学力を向上させることにより、全員を卒業進級させる。	C		
3 生徒 指導部	・安心安全な学校づくりを行うために、個の発達段階に応じた指導につとめる。 ・豊かな人間性を育むために、体験活動を重視した教育活動を増やしていく。	各部・関連機関と連携しながら、問題事象等に俊敏に、また丁寧に指導を行う。	A	B	・多くの関係機関の協力のもと、生徒が薬物や闇バイトなどのトラブルに巻き込まれないために、様々な学習会を計画、実施した。 ・問題を起こした生徒には、教員や関係機関と連携して迅速かつ適切に対応することができた。 ・文化祭、体育祭などの生徒会行事は、生徒の意見も取り入れながら、新しい取り組みに挑戦することができた。
		問題事象の芽を摘む予防活動をいっそう推進し問題事象ゼロを目指す。	B		
		各関係機関と連携して、薬物乱用防止学習、交通安全学習、非行防止学習等を適切に実施する。	A		
4 進路 指導部	・希望進路の実現に向けて、生徒個々の状況に応じた進路指導を行う。	学年に応じた進路学習を計画的に実施し、進路意識を高める。	B	A	・4年生の進路指導について、個々の希望に合わせ、丁寧に指導に当たり希望進路を実現できた。職場見学に進路部か担任が引率し、ミスマッチが出来るだけないように丁寧な指導を行った。 ・進路見学や進路学習を計画的に実施できた。 ・障碍者手帳取得者には、ハローワークや綾部市役所、綾部ボランティアセンター等と連携し対応した。
		４年生個々の進路希望に合わせた支援を丁寧に行い、希望進路の実現を目指す。	A		
		進路希望の具体化が困難な生徒に対して、関係機関と連携しながら丁寧な支援を行う。	A		
5 保健部	・心身ともに健康な学校生活を送れるよう、自己管理能力の育成を図る。	定期健康診断の事前・事後指導と感染症対策を徹底する。	B	B	・生徒の健康診断の受診率はほぼ全員が受診することができた。今後は要観察生徒の専門医への受診率を高めることが必要である。担任・保護者と連携しながらすすめていきたい。 ・スクールカウンセラー(以下S.C)利用の促進をはかり、S.Cへの相談回数をを昨年度より増やすことができた。 ・「保健だより」の月１回発行ができ、生徒・保護者への健康安全啓発ができた。
		生徒の実態に応じたほけんだよりの発行、保健学習を実施する。	B		
		生徒一人ひとりに応じた適切な支援ができるよう、日々の情報共有や実態把握を行う。	B		

分掌・教科	項目（重点目標）	具体的方策	評価		成果と課題
6 人権 教育部	・人権意識を高める学習を行い、生徒に人権意識を根付かせ、いじめのない学校生活を送らせる。 ・奨学金制度の周知徹底を行い、進学や就職に際しての金銭的な不安の解消に役立てる。	基礎学力定着のために、個に応じた指導方法の工夫改善を行い、希望進路の実現を目指す。	B	B	・同和問題と障害者問題について人権学習を2回実施。特に障害者問題については、障害者の方から講演をしていただき、卒業後の支援に結びついた。 ・経済的に支援の必要な生徒に対し、適切に奨学金の支援が行えた。
		人権意識を養うため、講演等の特設人権学習を年に2回実施する。	A		
		各学年部と連携のもと、生徒への奨学金制度の周知徹底に努め、希望者には適切な支援を行う。	B		
7 第1 学年部	・高校生活に慣れ、基本的生活習慣を確立させる。 ・生徒一人ひとりの様子を把握し、きめの細かい学習指導を行う。 ・豊かな経験の場をつくり、社会性を身につけさせ、人間性を育成する。	人権尊重の精神をはぐくむため、自己を大切にし、他者を認め合うクラス作りをすすめる。	B	B	・中学校を卒業し、初めての高校生活を送ってきたが、全体的に落ち着いた毎日を送らせることができた。 ・昼間の仕事と夜間の学校との両立を苦労していた生徒もいたので、今後もきめ細やかな面談を通して、規則的な高校生活をさせることが必要である。
		安全で安心した学校生活を送らせるために、毎日の健康状態を把握する。	B		
		自立に向けた生活習慣の確立・進路目標達成のため、定期的な個人面談を実施する。	A		
8 第2 学年部	・生徒それぞれの状況を把握し、生活・学習面において自らを律して行動ができるように指導を行う。 ・家庭や学校での豊かな交流により社会性を身につけ、人間性を育成する。	挨拶をはじめとする毎日の対話を通して、生徒の状況を把握する。	A	A	・挨拶や日常会話を通して生徒の状況把握に努めることができた。 ・特別な支援が必要な生徒に対し、生活習慣の見直しや交通機関を利用した登校を今後進めながら指導、支援にあたっていく。 ・生徒の進路実現に向けスキルや知識を身に着けさせていきたい。
		教科担当等の教員と連携を密にとり、必要に応じて生活・学習支援を行う。	A		
		面談を通して、自立に向けた生活習慣・進路指導を適宜実施する。	B		
9 第3 学年部	・基本的生活習慣を確立させる。 ・生徒一人ひとりの様子を把握し、きめの細かい学習指導を行う。 ・家庭や学校での豊かな交流により社会性を身につけ、人間性を育成する。	自己を大切にし、他者を認め合うクラス作りをすすめる。	B	B	・教科担当者との連携を密に図り、授業環境を整えることができた。 ・生徒ひとり一人の実態に合わせた指導を行い、出席率の増加に努めた。 ・来年度は各自進路を決定するので、進路部との連携を密にし、希望の進路に近づけることを目標とする。
		毎日の健康状態を確認し、お互いが安全で安心した学校生活を送る。	B		
		定期的に面談を行い、生徒の状態を把握し、自立に向けた生活習慣・進路指導を適宜実施する。	B		
10 第4 学年部	・生徒全員の卒業及び希望進路の実現を目指す。 ・生徒一人ひとりの学習状況と生活状況を把握し、他の教職員と連携を取りながら指導する。	積極的に生徒と交流を行い、得られた情報は職員間で共有する。	A	A	・保護者と連絡を密にして生徒が希望する進路実現に努力した。 ・総合的な探求の時間を利用し、進路実現のための知識やスキルを身に付けることができた。また卒業後の生き方について考える授業を展開した。 ・特性のある生徒には、関係機関や保健部と協力して対応することができた。
		就職活動に対して、生徒同士で高め合えるようなHR運営をする。	B		
		HRや総合的な探求の時間を有効的に使い、希望進路実現の一助にする。	A		
11 国語科	・社会生活において必要な国語について、その特質を理解させ適切に使用できるよう指導する。 ・言語活動を通じて、生徒の思考力や想像力、表現力を育成する。	語彙力向上のための学習の機会を週に1回以上確保する。	B	B	・漢字について勉強する機会を週1回確保することができた。今後も、よりよい教授方法を模索していく。 ・生徒が学んだことを振り返る時間を確保することができた。今後は、定期的な復習テストに取り組みたい。 ・単元のまとめとして、意見文や感想文等を書かせる時間を確保することができた。定期的に取り組みたい。
		生徒の理解促進のために毎回の授業内容を振り返る時間を確保する。	B		
		単元のまとめとして、自分の考え・思いを表現する時間を単元ごとに確保する。	B		
12 地歴 公民科	・地歴・公民の基本的な事項を理解し、知識として定着させる。 ・社会に出た時に必要な知識や能力、特に自分の意見や考えを持ち、それを相手にわかりやすく伝える能力を身に付けさせる。	生徒の実情に応じた教材を精選する。	B	A	・多くの具体的な事件や社j会問題、訴訟を取り上げて生徒の興味関心を高めることができた。 ・パワーポイントを利用し、図表や写真、動画を利用して、講義一辺倒にならないように、授業を工夫した。
		パワーポイントを利用した教材と授業プリントを用意し、授業への関心を高め、知識の定着を図る。	A		
		リアルタイムのニュースを教材化し、社会への関心を持たせる。	A		
13 数学科	・数学の基礎的・基本的な知識技能を身につけ、日常生活に役立てることができる。 ・数学における様々な問題に対し、諦めずに取り組むことで「考える力」を養う。	ノート点検を行い、ノートを使った学習を徹底する。	B	B	・わかる授業を目標としたが、達成できた学年と出来なかった学年に分かれた。ノート学習の徹底も同様である。 ・やる気のない生徒の対応に苦慮した。
		授業形態や考査方法を工夫し定期考査と日々の学習を繋げる授業を実践する。	B		
		特に障害や課題のある生徒に対し、わかる授業を目標に、達成感を感じさせ、満足度を上げたい。	B		
14 理科	・身近な事柄から理科に対する興味を持たせ，社会生活に必要な科学的知識・能力、科学的態度を身につけさせる。	理科に興味を持たせるため、演示実験や持ち込み教材・ICTを活用する。	A	A	・高校入学までの、生活経験や理科実験の経験不足を鑑みて、教科分野に応じた実験、社会人講師、新聞の科学記事等を利用して、補うことができた。このような多様な教材、社会との触れ合いが効果的であり、今後も継続する必要がある。
		自然や日常的な事柄と学習内容を関連させるため、社会人講師の登壇や新聞等を利用する。	B		
		理科における計算・知識を定着させるために、教科書以外に補助教材として、プリントを使用する。	A		

分掌・教科	項目（重点目標）	具 体 的 方 策	評 価		成 果 と 課 題
15 保健体育科	・保健、体育の授業を通して、生徒が心身ともに健康的に日々の生活を過ごすことができるための授業を展開する。 ・生涯スポーツの観点から、多くの項目を通して卒業後もスポーツに積極的に触れ合う姿勢を育成する。	授業始めに体育館ランニング２往復と体操、ストレッチ(柔軟体操含む)をおこなう。	A	A	・生徒の意欲を掻き立てる授業の実施に努めた。 ・経験したことのないスポーツを行うことで興味関心を育成することができた。 ・ICT機器を利用し、動画を用いて生徒とプロ選手の動作比較を行うなど、指導の工夫を行った。
		それぞれのスポーツへの知識や理解、興味を育成するため、全ての種目でプリントの資料を作成し、確認テスト、及び実技テストをおこなう。	B		
		多くのスポーツに触れ合う機会を持たせるため、１年間で7種目以上の生涯スポーツに取り組む。	A		
16 英語科	・日常生活の中に英語があふれていることに気づかせて、身近に使われていることを実感させ、自分で学ぶことができる力を育成する。	ICT教材を使って、英語への関心を高め、理解を深めさせる。	B	B	・全ての学年の授業で、i-Padを使って教えることができた。 ・授業中に、i-Padで問いを出し、解答させることができた。 ・単語テスト、ノートの提出を点数化することができた。
		生徒に授業内容を整理させ、理解を深めさせるため、毎時間ノートを回収し点検する。	B		
		生徒に知識を定着させるため、単語テスト等を実施して理解を深めさせる。	B		
17 芸術科	・基礎技術を充実させ、自ら表現する意欲を育てる。	授業規律を大切にする。	A	B	・授業への取組は、基本的なことはできている。 ・意欲的に取り組む生徒がいる一方、取り組めない生徒もいる。個々人の意欲をどう引き出すかが大きな課題である。
		授業時間を有効に活用し、完成度を高める姿勢を身につけさせる。	B		
		基礎から高度な内容まで表現できる幅を広げさせるため、技術差のある生徒が取り組める課題を取り入れる。	B		
18 家庭科	・自立する力を育成する。	身近な事柄を教材として選び、生徒の興味・関心を引き出すよう工夫する。	A	A	・調理実習スカーフ製作等、意欲的に取り組むことができた。 ・個人差があり、器具の扱い等に課題が残る。
		体験的な学習課題を多く設定する。	A		
19 情報科	・現代社会における必須アイテムである情報機器の基本的な操作を習得させる。	タッチタイピングの練習に力を入れ、文書作成ソフトによる反復練習を行い、文書入力量を重視して評価する。	B	B	・タッチタイピングの反復練習を行うことができた。今後も継続して行っていきたい。 ・プログラミングに取り組む時間が少なかったので増やしていきたい。
		プログラミングに取り組むことで様々な事柄の効率化を行う考え方を身につけさせる。	B		

学校関係者評価委員会による評価	①定時制教育が今後ますます必要となるであろう。数の多少ではなく、そのような生徒もしっかりと教育していく必要がある。 ②定時制で、体験型の授業を多く取り組んでいることを評価する。

次年度に向けた改善の方向性	①心身にストレスを感じやすい、学校へ通い辛い等、多様な生徒が多い中で、学校の指導による進路決定を望む生徒の決定率100%（6／6）、年度途中での進路変更（就業のための退学）1名という結果であった。あずかった生徒を進級・卒業させるという定時制としての役割はある程度果たせた。 ②不登校傾向にある、対人関係の構築が困難である等、定時制の方が適していると思われる中学生が進路選択上のミスマッチをしないために、定時制の特徴や良さを理解してもらえるよう、中学校教員へ向けての学校紹介や案内を行う。 ③定時制へ通う生徒の理解を更に深め、教職員間の協力体制をより強固なものにし、学力伸長、進級・卒業、進路希望実現へとつなげる。